

「実は大橋純子のメンバークだった！」 学生バンドのバックをとめた

—先生が商大にいらしたのは？

中村：昭和56年の4月です。

—それまでは？

中村：NECに6年。

—NECから、地方の大学に突然こられてどうでした？

中村：いや、私はもともと小樽出身ですから。—そうなんですか！小樽はどちらで？

中村：長橋です。小樽商大はかつて二期校でしたから、一応は受験に来たんですよ、様子を見に。二日あった試験のうち初日だけ受けて止しましたけど。

—そのときはもう北大合格は分かっていたんですね？

中村：そうです。二日目も来たんですけど、試験は受けずに床屋に行きました。ほら生協のところにあったでしょ。

—ありました。安かったですね。

中村：そうそう。床屋に行って帰ってきたんです。

—まさかここに来るようになるとは、当時は思わなかった？

中村：そうですね。全然。

—先生のご専門は

中村：ひとことで言えば、状態が確率的に変動するようなシステムのモデル化や分析です。—分かり易く言っていただくと？

中村：コンピューターシステムだとか、電話交換システムだとか、まあいろんな処理をする要求が発生しますが、そういう要求というのは不規則に発生するわけです。不規則に発生して、それを処理する時間というの、一定ではない。たとえば分かり易い例ではATMですね。

ATMからお金を引き出す要求を出すと、つ



なかむら たかし
中村 隆志教授

〈社会情報学科／計画科学講座 情報処理担当〉

- 1973年 3月 北海道大学工学部卒業
- 1975年 3月 北海道大学大学院工学研究科修士課程修了
- 1981年 4月 小樽商科大学赴任
- 1994年10月 小樽商科大学商学部教授

まりボタンを押すと中央のコンピューターに行って向こうで処理して帰ってくる。で、あちこちにATMがあって中央のコンピューターに不規則に来る訳です。それでまた、コンピューターの中で行う処理も、振り込みだったりなんだったりと処理時間が違う。そうすると場合によってはコンピューターの中で渋滞が起きたり、逆にずっと遊んでいる時もある。そういうようなシステムを最適に設計するために、モデルを作り、その性能をあらかじめ評価しておく必要があるんです。そのための研究をしています。

—もう少し噛み砕いていただけますか？

中村：そうですね。スーパーにレジを何台置いたらよいかという問題と同じだと思ってください。お客さんがどれくらいの頻度で来て、一回レジを打つ時間がどのくらいで、お客さんに待ってもらえる時間はどのくらいか、それらを総合してレジの台数を決める。分かりました？

—ふうっ、はいなんとか。ところでNHKのテレビで先生が学生時代、歌手の大橋純子さんと一緒に音楽活動をなさっていたということを知ったのですが、そのきっかけは？

中村：北大軽音楽部というサークルがあって、そこに一年から入って、

—キーボード？

中村：そうです。高校の時からバンドをやっていたんですけどできなくて、大学に入ったら絶対にやろうと思っていたもんですか

ら。そうですねサークルに入ってから半年くらいでしたか、当時藤女子短大にいた大橋純子さんがひょっこり来まして、一緒に歌わせてくれないかと言うんですよ。

—はじめて彼女の歌声を耳にした感想は？

中村：やはり、うまい！で最初のときはボサノバとかそんなの歌ってました。

—先生は音楽の傾向はどちらでした？

中村：もともとロックバンドだったんですよ。

でも一時期大橋さんの入った別バンドではボサノバとかやりましたね。

—先生が大学に入られたのは昭和44年、北大も学園紛争でしたね。

中村：北大はちょうど私が入学した年から紛争が始まって、入学式が、もう死語ですね、そう粉砕されて、5月28日から12月8日まで教養部封鎖で半年ずっと休み。

—で、その半年はほとんどバンド活動ばかり？

中村：そうですね、バンドとマージャン。

—テレビで久しぶりに集まったバンド仲間とはその後？

中村：3年ほど前に、なぜか急にまたバンドをやろうかということになって、やってるんですよ。昨年の11月だったかな、北海道新聞に写真付きで載ったんですよ。その前の週に道新が札幌のヤマハセンターが中高年向けのバンド用スタジオを作るという記事を出して、その関連で、たまたまというか僕らにインタビューしにきたんです。

—気持ち良いでしょう？

中村：まあ楽しいけど、腕はもうかなり落ちてます。みんな忙しいんで、練習も月にせいぜい2回くらいですから。あと、音楽関係では、私はこういうものも作っているんですよ。(やおら手帳を取り出されてわれわれに見せてくださった)。

—NECの歌！

中村：そう、NEC創立80周年で、記念歌を社員に募集したんです。

—作詞作曲ですか？

中村：いえ、作曲だけ。でも編曲は小林亜星さんと久石譲さんで。

—すごいですね。音楽的才能と専門の研究とはうまくシンクロすることありますか？

中村：いや、今のところあまりないですね。音楽は趣味ということ。